

こえを、きこう

# コカヌエネ

じようのぐち

## 城野口ユリフチの

### ご冥福をお祈りします



アイヌ遺骨  
返還請求訴訟  
ニュースレター  
No.12  
2015年7月18日  
北大開示文書研究会

## 城野口ユリフチの遺した言葉から

——北海道大学の研究者たちは「アイヌの墓は放置されていて、無縁仏あるいは遺跡として、掘っても違法ではない」とうそぶいて発掘を正当化していた。

毎日のようにアイヌは獲物をとったり山菜を採ったりして食うんだ。その時には、必ず、エカシは「お前な、(狩りに) 行ったら帰りに必ず、ライオマエサ、ばばやらエカシやら、ライオマエしたら、エカシやフチたち回って、見回ってこいよ」とな。ライったら死んだ者のことを言うんだ。「(お墓のまわりの) 草は刈らなくても良いんだ」って、アイヌは。草原こいでな、カムイたち、いたずらしてつかも知れないからな、よっく見て来いよ」って。「うん、分かった」って。(獵師が帰ったらエカシが)「見てきたか?」って。「見てきた、見てきた。何ともない、何ともない、エカシ、何ともないから心配するな」って。したら「イヤイライケレ、イヤイライケレ、ハセレポ、イヤイライケレ」、言うんだわアイヌ語で。そいって言ったよ。

これはね、アイヌのね、特徴なの。特徴って言葉、忘れないでね。アイヌの特徴なの。お前はナ、この部落のなになににせいよ、かにかにせいよっていう、そういうその、言いつけをしないんだ。ただ、そのねえ、(墓所のまわりの) 草原、草は刈らなくていい。草は自然のもだから、いいんだ。自然サ、返らせてる、神様だからナ。その、熊でも、山サ、狩りに行ったら、帰りにちよっくら回ってナ、熊でも……カムイと言うんだ。「カムイたち、いたずらしてるかも知らんから、墓ア、見守って来いよ」って。エカシが言うんだよ。これがその、ひとつの、言いつけなんだな。したら、「ウン」って。ワシ、それ忘れておった。だけど……。

これをね、あの、北大では、その、なにで、そんなふうになっているのをナ、何ドロボウこいてるんだべ。まーけないよ、これで、こんなこと。(2012年)2月17日に行つた時の(北海道大学側の)態度。わしはあれは死んでも忘れない。(1カ月後に予定されていた東京出前講座に)ワシも行きたいけどな、

アイヌ遺骨返還訴訟の原告のおひとりで、北大開示文書研究会の一員でもあられた城野口ユリフチが、3月27日早朝、入院先の病院でお亡くなりになりました。研究会一同、心よりご冥福をお祈りいたします。ユリフチは、お住まいのある浦河町の杵臼コタンで、コタンの墓地から何人もの同胞たちの遺骨が北海道大学によって掘り出され、持ち去られたままになっっていることに、長く心を痛めてこられました。「持ち去られた遺骨を大学から取り戻して欲しい」とのお母上の遺言を生涯忘れることなく、最期まで返還を強く求めてこられました。2012年の法廷では、「この問題が解決しなければ、死んでも死にきれません」と述べておられました。

# こえを、きく。



2011年8月25日、浦河町杵臼コタンの墓地でインタビューに答える城野口ユリさん。「何年に掘られた、と母は言っていなかった。ただ『シャモ（和人）たちが黙って、私たちの知らない間にここを掘って、ハチャ（父）やフチ（祖母）たちの骨を掘られて、掘られて』って。（私にそれを言い聞かせては）『かたきをとれ、かたきをとれ』って」

こんな体で、万が一のことがあったら困る。先生（医師）は「退院できる」って言うけどね、それでも用心に用心を重ねておかないばな。わし、命をかけてるんだ。ほんとに、あの親の姿な、うん。見たらな。

もしこれ、逆だったらどうする？ あなたがたがもし、こうだったら。どう思う？ な。これがほんとのね、シャクシャインと同じ、アイヌとシャモの戦いだ。わたしはそう思っている。ぜったい、負けないよ、わしは。そんなあんた、こつたらこつくらいで負けてたまるかと思ってる……。持ち越してしまうど、わし、ほんとに。こつたら胆<sup>も</sup>焼けてきて。親の子だわ、やつぱし、わし。母親がそういう母親だったから。

（遺骨のことを初めて聞いた当初は）大したことないと思ってたのさ。けどその、穴、穴だらけのそこ歩いたんだ。お墓の。びっくりしてびっくりして。「ここ落ちるなよ、上がれないぞ」って。びっくりしたの。「だれ、こういうことやったんだべ」って言ってたら、北大の、何だかって

いう医者、児玉（作左衛門教授）だからという医者に来て、5、6人、医者連れてきて、こう掘って、ガス灯点けて掘ったらしい。ガス灯って分かる？（夜間に発掘があったのですか？の問いかけに）夜やったんだ。

隠れて。ガス灯って覚える？ アイヌばかりでない。（後ろめたいから夜掘ったんですね？の問いかけに）そうだ。明治時代からやってるんだ。聞けばな。大きな穴だったよ。思い出されなかったんだ。いちばん大事なこと。「しつかりしてやるんだぞ」って。「しつかりばばの言ったことを間違うなよ」って。「絶対な、ただで返してもらうなよ」ってなあ。ただでな、シャモ（和人）の悪口、

言ったわ、ずいぶん。「昔ね、だれにもアイヌで、シャモの人さな、困ったからコメ貸せ、ヒエ貸せ、アワ貸せ、イモ貸せ、大根貸せ、って言った者、一人もいないんだ」って。「（もし和人に対して）そつて言ったら、貴様ら、自分で作って、自分でまくないって、そういう口、きいた」と、シャモは。「だから絶対シャモをか

らかうな。からかうもんでない」と。「おまえ、大きく胸張って暮らせ」って。「おらたちなんか、一回だつて貸せつて言つた覚えなからな」って。そつて言つたよお。

して悪口言つたわあ。「学問はないけれども、学問はない、情けないけれどもな、それでもちゃんと、学校行かないなら行けないなりに、私生活はしつかりやったもんだ」って。朝だつてな、一番星さ。「それが出たらな、起きて、鍋かけれ」って。「娘さあればちゃんと起きて、鍋かけてな。一番星、二番星、三番星さ、（順番に朝の支度をする手順が）あったんだ」と。「ちゃんとそれを見てね、やったものだった」って。

だからね、「自然を利用して、やったんだぞ」って。よく覚えといて。自然を利用して、アイヌたちは私生活したんだね。そのことがわし、分かつたわ。自然を利用して、活用して、そして暮らしたもんだ。ばば、言つたもん。「何もな、シャモやらな、よその国から来た者たちにな、なんも指さ

されて笑われることないんだぞ」って。「よそからきた者たちはよそのしきたり、そいつらはそいつらのしきたり、あるんだからな、なんにもな、おらたちの国に入り込まれて、そいて、あの、一から十までのことを笑われる必要はないんだ」って。「それ笑うくらいなら来ないばいばいでねえか」って、こうも言ったわ。憎たらしかつたんでないか、よつぼど。そう言った。かわいそうに。

ほんとにねえ、うちのばあさんみたいに、そういつて思った人、泣いて死んだアイヌ、いっぱいいるの。ほんとだよ。そいつて思つてね、泣きながら死んでいったハボヤら、エカシヤら、いっぱいいる。ほんとに。わしも泣いた。その時。もらい泣きしたよ。うちのばば、割と教養のある人だった、アイヌでありながら。人、来たらちゃんとご挨拶するしね。挨拶してさ、ちゃんとやったんだよ。あんなふうな(辛い)思いして死んでいったかなあと思えばね、う

ちのばばだけでなく、いっぱい、そういうウタリの人がいっぱいな、と思う。口に出さないだけで。絶対に負けるなよって。「これに負けたらお前たち、もう終わりだぞ」って。うん。「負けるなよ、負けるなよ」って、何回言ったかさ。「北大出の、日本一の頭の良い学者ばっかり来るんだべ」って。「(がん首を)そろえて来るべ」って。したらな、「お前たち見たらびびくらこいて、後ずさりするような者ばかり、来るんだべ」って。「かわいそうにな」って。わしらをかわいそうがつて、涙流してさ、「かわいそうになあ、お前たち、ほんとにな、おらたちもう少しな、勉強して、学歴あつたらなあ、お前たちさもこんな思いさせなくてもいいかっただんだべな」って、ほんとに泣いたよ。

「だけど、ばば」って、「わしが付いてるから大丈夫だ」って。「ぜーったい、わしに付いていれば負けないんだ」って。学校時代から

な、負けなかつたんだから。「絶対に負けないよ」って。「こんなことくらいで、わし負けちゃいないよ」って言った。「絶対戦つて、勝つてみせるからな」って。「勝つたらな、ばば、イチャルパのできる、カムイノミの達者なエカシいるから、ばば死んでいなくても、教えるからな」って。「頼むぞ、頼むぞ」って、そう言つて、わしの手、握つてね。そつてしたんだよ。

だからさあ、わしは、これをほんとに負けたくないんだ。決して。あの手、この手を使つてもね、先生がた(弁護士)の力、借りてねえ、(裁判で)負けたというならば、わしもほんとに終わつてるな。終わつてる。何にも言うことないわ……。情けなくて……。何にも言うことないわ……。負けたくない一心だ。

2014年12月28日、入院中の北海道  
大病院にて。

聞き取りと構成 北海道開示文書研究会



# ラムトウナシ きいて、始める。

## お別れのことば

北大開示文書研究会共同代表  
少数民族懇談会会長

### 清水裕二

ユリフチ、本日、このようなお別れをしなければならぬとは……。

あなたが天に召される前日、私はあなたの病床の枕元を訪ねました。「意識は定かではないが、声は聞こえているはず」と看護師から聞き、あなたの耳元で「お顔を見に来ましたよ。頑張ろうねえ」と語りかけました。するとあなたの口元がわずかに微笑み、声をかけるたびに血圧計の波形が上昇しました。私の声をちゃんと聞いてくれたと安心して帰宅しました。まさか翌朝、訃報に接することになるとは、予期していませんでした。私はいつもあなたから、迫力ある言葉、叱咤激励をいただいてきました。改めてお礼と感謝を申し上げます。ありがとうございました。そして心よりご冥福をお祈り申し上げます。

あなたと私の間のいろいろな思い出のうち、ここでは二つに限って感

謝の言葉を述べたいと思います。

まず「少数民族懇談会」のことで

す。この会はおよそ40年前、ここ日高で誕生しました。当時、とりわけこの地域では、アイヌ民族への陰険な差別と偏見が底深く存在していました。アイヌであるというだけでいじめられ、差別が日常茶飯事といえるほど悲惨な状況でした。そんな時代に、とりわけ教育に関する課題や差別の問題に熱心に取り組んでおられたのが、「三人娘」と称されたヨチさん、サトさん、そしてユリさんでした。いま、ついにどなたもこの世に存在しなくなった三人娘のみなさんは、学校の教室の中での民族差別を前に「教育現場を変えなければ」と立ち上がられました。浦河高校をはじめ日高管内の心ある教師たちの支援を受け、「偏見や差別のない民主的な学校を実現させよう」と設立されたのが少数民族懇談会でした。少数民族懇談会は以降、ふた月に1度の例会を継続してきました。あなたはいつも昼食のことを心配して、鍋からあふれるほどの赤飯やおこわを用意してくださいました。私たちはそれを遠慮もなく美味しくいただきました。そんな私たちを見て、うれしそうに穏やかに微笑んでいる

あなたの様子が、いまも目に浮かぶようです。少数民族懇談会の私たちは、これからもあなたのご遺志を継いで、理念を変えることなく、真摯に活動を展開していくことを誓います。

二つ目は、いわゆる北大アイヌ人骨問題です。あなたのご先祖を含む大勢のお骨が、北大の解剖学者らによってコタンの墓所から盗掘され、今もそのままになっている問題です。あなたは初め、相手方と穏やかに懇談して解決すべく、北大事務局を訪ねられました。2012年2月

17日のことです。寒風吹きすさぶ午後でした。あろうことか北大当局は建物の玄関前に警備員を配置し、入館すら拒絶しました。理不尽な対応に、あなたも、同行の私たちも、怒り心頭に発しました。長い押し問答の末にようやくドアの内側に入ったものの、玄関先から部屋に通されることはついになく、高齢で立っているだけでも辛い状態だったあなたは、冷たいコンクリートの地面に座らされるといって仕打ちを受けました。この体験があなたに、2012

年秋の北大提訴を決意させたのだと思います。

北大ははまだ謝罪すらしていません

ん。本来あなたを応援すべき北海道アイヌ協会からも、なんの支援もありません。悔しい限りですね。あなたは法廷でアイヌの生活風習を語りました。北大は自らの盗掘行為を棚に上げて「墓の骨は無縁仏だった」などと強弁していますが、あなたは「アイヌはお墓を放置などしていない。エカシ（長老）はいつもコタンの若者らに墓所の見回りを怠らないよう命じていた」と明言し、アイヌの風習を知らない人々の理解を深めようとしてきました。

裁判と平行してつい先日、大学の集めたおびただしいアイヌ遺骨を白老に再集約などさせないよう、日弁連に人権救済の申し立てを行ないました。どんな判断が下されるかまだ分かりませんが、確認次第すぐにご報告いたします。

ユリフチ、志半ばにしてこの世を去らなければならぬあなたの悔しさを、ひしひしと感じます。ユリフチ、80余年、ほんとうにご苦労さまでした。どうぞ安らかに眠り下さい。さようなら。さようなら。

故城野口ユリさんの告別式(2015年3月29日)での弔辞から



北海道大学事務棟のドアの前で警備員にはばまれる城野口ユリさん(左)。城野口さんが繰り返し求めた北海道大学総長との面談を、北海道大学側は最後まで拒み続けた。2012年2月17日撮影。

## 城野口ユリフチの 遺志を継ぐ

北大開示文書研究会  
共同代表

殿平善彦

北海道をはじめとしたアイヌコタンの墓から、人類学の研究者たちによってアイヌ人骨が持ち去られるということが明治期から戦後の1960年代まで続いてきました。現在、全国の大学に残されているお骨は、個性性のはっきりしたお骨で1636体、個体ごとに特定できない箱になったものが515箱、残っているわけがあります。北海道アイヌ協会の要求などによりまして、北海道大学は若干のお骨を返還した事実がありますけれども、大部分は現在も大学に残されたままで、北大はアイヌ納骨堂というものをつくって、お骨をそこに収蔵しています。2008年、アイヌのエカシ小川隆吉さんは、情報公開法を使って、北海道大学にアイヌ人骨収集関連の文

書の公開を請求しました。大学は最初、出し渋っていたのですが、何度かの請求によってかなりの量の関連文書を公開しました。この文書を読み解こうと、この会が生まれたわけでありました。

文書を読み解く中で、北海道の浦河に住む城野口ユリフチ、あるいは小川隆吉エカシの直接の先祖の骨が持ち出されていたことが判明いたしました。2012年2月17日、城野口さんと小川さんは事前に通告しまして、北海道大学の総長に会いにくわけです。雪のそぼ降る寒い午後、アイヌの老人2人が総長に会いに行つたのですけれども、どういうわけか、北大は屈強のガードマン4人を雇って、総務課の建物の前をガードして、2人を入れようとしません。北大の態度は、かつてアイヌ人骨を発掘して、アイヌの抗議を無視し続けた植民地主義、帝国主義、そしてレイシズム(人種・民族差別主義)的な学問態度を少しも改めていないというふうに思われたわけでありました。北大の態度に失望した2人は返還訴訟を決意して、その年の秋に提訴に踏み切りました。その後、紋別の畠山さん、浦幌町の差間さんなどが原告に加わり、現在も遺骨返還の

裁判は継続中でありました。

いっぽう国会は2008年に、アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議を衆参両院で可決したのですけれども、そこから日本政府の新たなアイヌ政策が始まります。ところが現在、日本政府が計画しているアイヌ政策というものは、北海道の白老町に国立アイヌ博物館と慰霊空間をつくって、全国の大学にあるアイヌ人骨をそこに集めようというわけです。けつきよく、大学は自分たちの持つている遺骨を「慰霊空間」に運ぶことによって責任を逃れ、人類学者たちはそこで引き続きアイヌ人骨を使った研究ができるというシナリオになっているわけです。こんな理不尽なことを許しておいていいのか、という深い憤りを覚えます。

みんなで気持ちをお合わせて、この150年にわたるアイヌの人々の怒りを、きちんとした形で表現をして、遺骨をコタンに返ために努力を続けていきたいと、そういう願いを持っているものであります。

2015年1月30日、東京出前講座「アイヌの遺骨はアイヌのもとへ」(平和と労働センター・全労連会館)でのあいさつから(抜粋)

# 北海道大学自身による

## 「静内共同墓地発掘」事件の経緯

今から59年前、北海道大学医学部は静内町(当時)の旧静内駅前共同墓地から166体のアイヌ人骨を持ち去ったまま、今も返還していません。当の北海道大学はこのことをどう考えているのでしょうか。以下の記事は、北海道大学が出した「北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書」(2013年)からの抜粋です。この報告書は文書研のサイトでご覧いただけます。

### ④静内町静内駅前 (1956年)

「アイヌ民族人体骨発掘台帳」には、38〜44頁にかけて、「日高 静内」として「静内1」〜「静内166」の年代・性別の記載がある。1体は「不在葬」(骨格がない場合)である。4体には頭蓋骨が「なし」との書き込みがあり、その内2体は発掘状態欄に「四肢骨のみ」と書き込みがあ

る。

アイヌ納骨堂には、静内発掘の頭蓋骨161体と四肢骨がおさめられている。

解剖学第二講座が発掘した「日高静内」は、「静内駅前共同墓地」であり、同講座が「人骨の学術調査」を担ったことは、以下に掲げる「静内町史」によって明らかである。

この墓地(静内駅前アイヌ墓地)は、静内町の都市計画にもとづいて、昭和三十年から三十一年にかけて、新設の駒場墓地に移転改装されたもので、日本人墓地に隣接していた。日本人の縁故墓地は昭和三十年度において改葬は完了していたが、アイヌ墓地の方は、全部が無縁故であった。この無縁故アイヌ墓地を、昭和三十一年八月から十月に改葬したが、その作業は、静内町、北海道大学第二解剖(責任者児玉作左衛門教授)、日高郷土史研究ケハウの会、

静内高校郷土研究部の四団体が行ない、人骨の学術調査は、北大医学部が担当して、現在なお進行中である。

中田幹雄(静内高等学校郷土研究部員)は、「アイヌ墓地発掘について」(『北海道地方史研究』第22巻)において、静内駅前共同墓地発掘経緯の概略を、以下のように述べている。

(1) 静内町都市計画にもとづき、静内駅前共同墓地の駒場墓地への移転改葬が、1956〜1957年に行われた。墓地面積は約1.8町歩で、そのうちアイヌ墓地はおおよそ半分である。

(2) 第一次調査(1956年8月上旬)で10体、第二次調査(1956年9月下旬)で151体を発掘した。

(3) 和人墓地の改葬は809件で、アイヌ墓地の改葬は皆無である。

(4) 「聞き込み調査」によれば、駅舎(改行は1926年)・日通事務所・鉄道工事の中に多くのアイヌ人骨が出土しており、アイヌ墓地面積は相当広がったと思われる。

(5) 静内高校郷土研究部は、北大医学部解剖教室の調査に協力参加し、発掘・埋葬状況・副葬品調査を担当した。

なお、中田幹雄は、「重葬」の人骨・副葬品スケッチを添えている。また、掲載誌冒頭口絵には「親子らしい二つの棺」、「埋葬指定あるところは土が混乱しているため処女層と区別出来る」、「発掘された遺骸の一例」とキャプションを付した写真を載せている。

斉藤庚八は、論文で次のように述べている。  
……1956年北海道静内郡静内町において9月26日より10月5日の10日間に160余体のアイヌ骨格を発掘することが出来た。しかも、骨格の保存状態は良好であり、人類学的調査に使用し得るものも100余体という誠に貴重なる資料である。……本資料は明治末期まで使用されていた旧アイヌ墓地のものであり、墓地の所在地は現在の日高線静内駅につづいた小丘陵地帯であり、静内駅開設の際の工事中にも人骨が多数出土したといわれる。しかし当該墓地の詳細なる記録は明らかでない。……(発掘は)本学解剖学教室員を主体とし、土地の教員養成所生徒、高校の教員及び生徒、人夫の援助の下に行われた。

「解剖学第一講座（記録）」から関係部分の抜粋

(1956年)	8月17日	松野先生、下山(広治、助手)先生 静内え出張
	8月21日	松野、下山両先生帰校
	9月26日	松野、中根(文雄、講師)、下山、山口の四先生は静内え出張
	10月1日	水野先生、大友、静内え出張(第二班)アイヌ墓地発掘調査のため
		中根、下山先生 帰校
	10月2日	岸本先生 静内え出張
	10月6日	松野先生、水野先生、大友は多大の収獲をおさめて帰札
(1958年)	1月27日	児玉教授、松野助教授、中根助教授、山口(和夫、助手)先生の4人で於食堂 静内アイヌの男女性別判定さる

表17

No.	発表名等
1	松野正彦・加藤三郎「静内アイヌ頭蓋における前頭・側頭骨接続について」、『北大解剖研究報告』第82号、1958年2月
2	松野正彦・岸本総一郎「静内アイヌ頭蓋における翼上骨について」、『北大解剖研究報告』第101号、1958年9月
3	中根文雄、吉田鉄夫「静内アイヌ頭蓋における眼窩下孔について」、『北大解剖研究報告』第112号、1958年12月
4	伊藤正彦「静内アイヌ頭蓋における歯牙発育異常の研究」、『北大解剖研究報告』第149号、1959年12月
5	斉藤庚八「静内アイヌ頭蓋における歯牙の硬組織変化」、『北大解剖研究報告』第157号、1960年2月
6	松野正彦「アイヌの頭蓋容積について」(日本解剖学会第6回東北・北海道連合地方会講演)、『解剖学雑誌』第35巻第6号、1960年12月
7	松野正彦、加藤三郎、加藤和雄「静内アイヌの頭蓋容積について」、『北大解剖研究報告』第162号、1960年12月
8	松野正彦・菅野吉一・兼重達男「日高アイヌ頭蓋における前頭・側頭骨接続について」(日本解剖学会第19回東北・北海道連合地方会講演抄録)、『解剖学雑誌』第48巻第6号、1973年12月
9	Sakuzaemon Kodama and George Kodama, "Studies on Artificial Injuries in Shizunai Ainu Skulls", 『北方文化研究』第2号、1967年3月(児玉作左衛門・児玉讓次「静内アイヌ頭蓋における人為的損傷について」)
10	松野正彦・武田充弘「下顎骨の人類学的研究——静内アイヌの下顎骨について」(日本解剖学会第22回東北・北海道連合地方会講演抄録)、『解剖学雑誌』第51巻第6号、1976年12月

松野正彦・加藤三郎は、「余等は1956年秋北海道日高国静内町におけるアイヌ墓地発掘によつて得た多数の頭蓋を調査する機会を得た」と論文に記しているに過ぎない。斉藤庚八・松野正彦ら解剖学第二講座関係者による記述の粗さは、中田幹雄の記述とは比較するまでもない。教室日誌の「解剖学第一講座(記録)」において、静内駅前共同墓地に

以下のようなのである。「多大の収獲」はアイヌ人骨166体(内、不在葬1体)を指していた。その後、松野正彦のもとで、野帳(フィールド・ノート)をもとに発掘人骨の整理・研究が行われ、静内発掘No1～No166の整理リスト《資料51》が作成された。整理リストでは、「整理No」として新規番号(大半が枝番号で、発掘番号と異なる)

が1体毎に与えられた。その整理番号が、四肢骨の包み紙や四肢骨箱に表示されることとなった。静内駅前共同墓地発掘のアイヌ人骨を資料とした論文は、表17のとおりである。1960年に松野正彦が解剖学第一講座教授に就いたことに伴い、これらの静内駅前共同墓地発掘のアイヌ人骨は解剖学第一講座において保管されることになった。解剖学第一講座では、松野正彦が1977年に急逝した後も、静内駅前共同墓地発掘のアイヌ人骨を保管していた。

なお、1982年に海馬沢博から静内駅前墓地発掘は盗掘だと批判された医学部は、発掘に携わった医学部解剖学第二講座の技術職員から、1956年当時の事情を1982年4月6日に聴取した。その際の聴取記録の全文は、下記のとおりである。

1、発掘作業は、当時の本学部第2解剖学教室松野正彦助教授(52・5・6逝去)が責任者となり、現地の関係機関(町役場)等からの要請により、まず、下調べを行い、その後本格的な発掘作業を行うのが通例であった。勿論それには、道教委等関係機関において適正な手続きを経、許可を得た上で実施したものであり、盗掘では絶対にあり得ない。

1、現場は、明治末期まで使用されていた旧アイヌ墓地であったようだが、当時は墓地ではなかった。他の場所に正規の墓地があった。

1、発掘の前にはアイヌ式による慰霊祭を現地の長老等関係者を招待して実施した。

1、発掘した人骨、副葬品については、本学部と関係機関と協議した上で大学に持ち帰ったもので、独断で持ち帰ったような事は絶対にない。特に埋葬品については、関係機関が嚴重にチェックし処理されており大学に持ち帰ったものは関係機関が引取らなかつたもの(極少数)を大学が保管すると云うことで現在嚴重に保管されている。



1月30日に都内で開かれた出前講座のようす。  
会場には100人を超える参加者が集まりました。

## 出前講座 in 東京 パート2 「遺骨問題から考えるアイヌ先住権」

**開催決定!**

1930年代を中心に、北海道大学などがアイヌ民族の墓地を発掘し、収集した大量の遺骨を、コタンに返還させる運動が広がっています。奪われた骨をコタンに取り戻すことは、アイヌ先住権の主張です。アイヌ先住権について掘り下げて考えてみましょう。

- とき** 2015年10月31日(土曜) 11:00～16:00  
**ところ** 公益財団法人人権教育啓発推進センター人権ライブラリー多目的スペース  
 〒105-0012 東京都港区芝大門2-10-12 KDX 芝大門ビル4F  
**入場料** 無料  
**共催** 関東ウタリ会／北大開示文書研究会

### バックナンバーのご案内

アイヌ遺骨返還請求訴訟ニュースレターは、北大開示文書研究会のウェブサイトで開催中です。どうぞご活用ください。  
<http://hmjk.world.cocan.jp/index.html>

#### アイヌ遺骨返還請求訴訟ニュースレター第12号

発行日 2015年7月18日  
 編集発行 北大開示文書研究会  
 共同代表: 清水裕二、殿平善彦  
 〒077-0032  
 北海道留萌市宮園町3-39-8(三浦忠雄方)  
 TEL (FAX) 0164-43-0128  
<http://hmjk.world.cocan.jp/index.html>  
 電子メール ororon38@hotmail.com

アイヌ遺骨返還訴訟原告へのご支援は、北大開示文書研究会が窓口を開いています。

ゆうちょ銀行振替 02790-1-101119  
 口座名 北大開示文書研究会

号数	発行日	おもな記事
No.01	13年1月25日	城野口ユリさんの意見陳述書／ほか
No.02	13年4月19日	市川守弘弁護士の意見陳述／藤野知明さん「遺骨返還訴訟傍聴記」
No.03	13年6月14日	小川隆吉さんの意見陳述書／清水裕二さん「北海道大学のアイヌ墓地発掘事件」／ほか
No.04	13年8月30日	浦河町杵臼のアイヌ墓地を訪ねる
No.05	13年11月8日	原告準備書面「北海道大の発想は同化政策そのもの」／殿平善彦さん「遺骨に出会う」
No.06	14年1月31日	畠山敏さんの訴状／ほか
No.07	14年4月4日	畠山敏さんの意見陳述書
No.08	14年5月30日	アイヌ墓地「発掘」問題をめぐる動き／パンフレットただいま完成／三浦忠雄さん「第14回政策推進作業部会議事概要を読んで」
No.09	14年7月19日	榎森進さん「「国連宣言」で謳われている先住民族の諸権利を無視した政府のアイヌ民族政策」／政府「アイヌ遺骨返還ガイドライン」をメッタ斬り!
No.10	14年8月31日	浦幌アイヌ協会・差間正樹さんの意見陳述書／殿平善彦さん「紋別出前講座開会のごあいさつ」／植木哲也さん「遺骨「返還」ガイドラインの同化思想」
No.11	15年1月30日	はやわかり! アイヌ遺骨返還訴訟／原告の声を聞こう／新しいタペストリーができました／ほか